

公園内で見られる植物

写真は 10 月 26 日（日）
自然観察会で見られた
植物です



アキノキリンソウ（キク科）

別名「アワダチソウ」という。かの有名な「セイタカアワダチソウ」の仲間。でも名からくるイメージはどうでしょう。花が「キリンソウ」に似ていて秋に咲くので“アキノ”を付けたようだ。美しい紅葉にも負けじと、足元の鮮やかな黄色い花が目を引き。



キッコウハグマ (キク科)

幕末、長州藩が使った白毛の軍帽を“白熊 (ハグマ)”と呼んだ。白熊はネパールやチベットに生息するヤクという牛の仲間似た動物の白い毛の事。これに花びらが似ていて、葉が、亀の甲羅 (キッコウ) に似ている。



セイタカアワダチソウ (キク科)

草丈が高く、黄色い小さな花が“泡立つ”ように見える。北米が原産で、明治時代の観賞用として導入。空き地や道路脇、土手などに急速に増殖した。ずっと花粉症の主な原因とされていたが、虫媒花なので、濡れ衣のようだ。



ミゾソバ (タデ科)

溝のような湿った場所に群生している。花や草姿が少しソバに似ている。それで“ミゾソバ”
また、葉が牛の顔に似ていることから“牛の額”や“牛面草 (ギユウメンソウ)”の異名もある。



センニンソウ (キンポウゲ科)

花は小さいが群がって咲くのでよく目立つ。花が終わると写真のように白くて長い毛が密生する種をつける。これを仙人のヒゲに例えたとか、白髪に例えたとか言われる。道端や林縁で日当たりの良いところに生える。



ムラサキシキブ (クマツヅラ科)

花は夏に咲く。秋に紫色の小さな実をたくさん付ける。名前の由来はこの美しい紫色の実を紫式部に例えたという説がある。



サルトリイバラ (ユリ科)

笹巻の時期に西日本では団子を包むのに使う。根茎は薬用になる。落葉つる性半低木で、枝に鉤状の刺がある。花は地味だが実は赤くよく目立ち、リースに使えば良いアクセントにもなる。



ヤマボクチの仲間 (キク科)

葉の裏は、白い毛で覆われている。葉を乾かして石臼で挽き、それをふるいにかけて白い綿毛だけを集め火おこしに利用した。花は“アザミ”に似ているが、アザミのように目を引くような花ではない。



オケラ (キク科)

どこかが虫に似ているわけではない。3裂している葉が蓑 (ミノ) に似ていて、これをウケラといった。ウケラがなまってオケラになった。

花のまわりにある魚の骨のような“包 (ホウ)”が特徴的だ。



センブリ (リンドウ科)

煎じ液は苦く、千回振り出しても苦味は消えないと言われるので、この名前。江戸時代中期以降胃腸薬として使われるようになった。定期的に人の手が入るような草地や法面が維持されないと、無くなっていくかもしれない。花は密集して生え、白くてかわいらしい。



コウヤボウキ (キク科)

高野山で、枝をほうきの材料にしたことから付いた。花は本年枝の枝先に付き、2年枝には付かない。筒状の花だが、裂片が反り返っているのが面白い。